中国哲学史の描き方について
―胡適と馮友蘭との比較を通じて

福谷 彬（FUKUTANI Akira）*

本発表では、日本と中国での中国哲学史の描き方の違いについて簡単に比較し、中国哲学史における記述法の二つの典型を示した思想家として胡適と馮友蘭を挙げ、二人の方法論の比較を通じて、今後の研究方法について考えたい。

1886 年設立の帝国大学には「東洋哲学」があったが、続いてそれが「中国哲学」と「インド哲学」に分けられた。しかしながら、そこにおける「中国哲学」の概念は、未だ「中国哲学」とりわけ「朱子学」と「西洋哲学」との接点を無理矢理求める傾向が強かった。

啓蒙時代を終えて、本格的な哲学史として、狩野直喜『中国哲学史』（1953 年）、武内義雄『中国思想史』がある。これらのものと、後述の胡適書、馮友蘭書との違いはかなりはっきりしている。つまり、狩野と武内においては、いわゆる哲学が表に出ることは、できるだけ避けられているだけでなく、馮や胡のような特定の哲学との結びつきは全くない。

総じてこれらの人々は第一義的には古典文献学者であって、馮や胡のような哲学者ではない。その意味で彼らの方法は古典的ではあったが、裏面では歴史を記述する上での特定の視点を持たなかったと言える。

更に夭折した安田二郎の『中国哲学研究』には本格的な哲学との関わりが見られる。すなわち安田の場合は西洋哲学史において、身につけられた分析の道具としての哲学的概念が縦横に駆使されており、それこそ彼の研究方法の特徴だった。これは西洋哲学研究と中国哲学史研究と関係として最も本格的かつ重要なものであり、漸く中国哲学史という分野の成熟を示すものであったが、その後継承されることが無かった。

20 世紀初頭に中国にも中国哲学というジャンルが現れた。民国八年（1919 年）に胡適が書いた『中国哲学史大綱』巻上は中国における最も早い中国哲学史に一つであった。胡適はコロンビア大学でデューイにプラグマティズムを学び、その観点から、中国哲学史を新たに構成したという点で、画期的な意義がある。胡適のこの書は残念ながら完結しなかったが、胡適の哲学史観は、非常に鮮明に現れている。これに次いで中国哲学として著名なものは馮友蘭のそれである。馮友蘭は幾通りも中国哲学を著しており、民国 30 年（1941 年）に書いた「中国哲学史」は、胡適のプラグマティズムに代わって、馮友蘭が留学中に身につけた、アメリカの中性一元論（ニュートラルモニズム）を取り入れている。中性一元論とは、観念と物質という二元論とは究極の對立ではなく、そのどちらでもない、ニュートラルなものの副産物としての二次的な存在に過ぎないという考え方である。

このように、胡・馮両氏を比べれば、明確な方法論の違いを認めることができる。すなわち、胡氏は中国哲学の社会上の機能に着目し、馮氏は哲学の存在論に注目した。

残念ながら、胡適の中国哲学史大綱は上編だけで、中絶した。現代の中国哲学史研究は、馮友蘭のような新実在論にせよ、史的唯物論にせよ、特定の学説内容を哲学史の基準とする、ものは無くなってきている。個々の時代における哲学の役割を解明しようとする胡適の方法論には、再興されるべき価値があるものと思う。

* 京都大学大学院文学研究科博士後期課程。